

<新刊紹介>今谷弘著『津軽のじゃっぱ汁』：わたしの国語教室

著者	清水 節治
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	187-188
発行年	1998-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020015

今谷 弘著

『津軽のじゃっぱ汁』——わたしの国語教室——

清水 節治

サブタイトルどおり著者の高校国語教師としての実践記録が本書の内容だが、その中心には常に郷土津軽が存在している。そこから平田小六の「山姥」、大塚甲山の「無感覚」の教材化や、円地文子の「お花見」の授業が生まれた。著者が当時勤務していた弘前実業には、同校で編んだ副読本『郷土文選』があり、「お花見」はそれを活用しての研究授業だった。それは弘前の「日本一の桜」の美を作家がどうとらえたかを、地元の眼で確かめる試みでもあった、という。

「地元の眼」は、さらに足元にも注がれていく。「国語表現」の授業では生徒を紙芝居製作に導く。その過程を生徒の眼

でとらえた作文が載っていて、これがまさに面白い。今谷先生はトレードマークの微笑を浮かべながら生徒たちをうまく「口車」に乗せてグループを作らせ、昔話を割り当てる。作業には次第に熱気が生じ、完成も目前となった時もう一歩先きに生徒たちを誘い込む。紙芝居を先生たちに見てもらおうというのだ。これが成功裡に終り、生徒たちが達成感に包まれているとき、さらに先生は近所の保育園での発表会を持ちかける…。

生徒たちの作った紙芝居の「おにばばと小僧っこ」と、保育園での写真も採録されているが、まことに微笑ましい。「高教研」でこの発表をした際に、「実践であ

って研究でない」との指摘があったとの注記がある。つまらんことをいう者はどこにもいるものとみえる。どんなすぐれた理論も研究も、目の前の生徒たちを動かす力がなくては意味があるまい。今谷さんは熱心な研究者で、本書にも『舞姫』『羅生門』などの教材についての論考もあるが、それらも常に具体的な授業と結びついているところが貴重だ。篤農家が品種や施肥にこだわるように、今谷さんは目の前の生徒たちのために、せっせと教材を選び授業の構想を練る。その姿勢とそこから生まれたすぐれた実践に拍手を送りたい。

本書にはもう一つの柱があつて、それは師小田切秀雄についてのものもろである。著者は弘前工業機械科を卒業後、川崎で旋盤工などの勤めをしながら法政の二部に入學、三年になる時に一部に移り、そこで師と師の学問に触れる。三島事件をゼミで先生に伝えたのは自分だ、というエピソードも語っている。

「物の見方や考え方は小田切先生から学んだ」し、「今も小田切『教室』（手紙で教えを乞い、上京の折には訪ねさせて

いただいている」へ通う」とある。同様の思いを抱く同窓生は少なくないだろうが、今谷さんは師の勧めと励ましで、大塚甲山に関する二冊の著作を成し、恩師を国語教育関係の講演会講師として東北の地に招聘することにも力があり、弘前の自宅に師を招きもした。その師事・傾倒ぶりは並みのものではない。本書には九六年の青森での恩師の講演記録（書誌学・文献学と近代文学）など、貴重な資料も収められている。

（しみず せつじ・通教部講師）

▽一九九七年 著者刊（入手は、弘前市宮園四―一二―七の著者に直接連絡）
△著者 一九七一年卒 青森県立岩木高等学校教諭

里原 昭著

「琉球弧の世界——大城立裕の文学」

表題の「琉球弧」とは作家島尾敏雄氏の「ヤポネシア」論に発しているらしい。すなわち奄美諸島、沖縄諸島などの島々はそれぞれの島の地理的、歴史的に培われた民族的個性を持っているので、この地域の独自性から地域の個性を主張し、文化や思想を発想しなければならぬというものである。そしてその中心は何といっても沖縄であり、そこは作家大城立裕、そしてまた最近芥川賞をたて続けに受章して注目されている沖縄の若い作家たちの立脚地でもある。著者里原氏は前著「琉球弧の文学・大城立裕の世界」（法政大学出版局刊）で大城文学を論じたが、今回はその続論であり、次のような

中村 馨

諸作品をとりあげている。「日の果てから」「かがやける荒野」「二世」「やさしい人」「ニライカナイの街」「島塚」「迷路」。里原氏がこの中で特に力点を置いているのは「かがやける荒野」という作品である。この作品の舞台は「廃墟」と化した戦後の沖縄（コザ市が中心）であるが、作者大城氏は荒野を不毛の地とせず、むしろカオスととらえているようだ。そして戦後の沖縄を回想し「米軍占領下の沖縄に帰って見たら、皮肉にもそこに“自由”があつた」といつている。この作品はさまざまな人間がリゾーム状にからみあっているが、沖縄の戦後史を表象しているが、荒野は妙に明るく、カオスは創